

江戸に伝わった八丈島の疱瘡に関する情報

—その入手経緯と背景—

對馬 秀子¹⁾，酒井 シヅ²⁾¹⁾順天堂大学医史学研究室 研究生，²⁾順天堂大学医史学研究室

本報告では、近世八丈島の疱瘡について下記の史料をもとに、医家が疱瘡の情報を入手した経緯と当時の島の社会的背景について述べる。

日本の疱瘡史の中で八丈島は、古より疱瘡が無いといわれていた。しかし、1790年代後半になると八丈島の疱瘡流行のことが医家によって伝えられるようになる。どのような経路で情報が伝わったのだろうか。八丈島以外の伊豆諸島との違いがあるのだろうか。現在、八丈島における疱瘡罹患の史実は「痘瘡死亡者供養塔」、旧家の系譜、あるいは路傍の祠などから窺い知ることができる。昨年(2022)の第114回総会では、中世からの疱瘡の史実を報告した。本報告は、情報の入手という点に視点をおく。

1. 疱瘡の情報源と社会的背景

1) 原南陽著『痘瘡作全』、『叢桂偶記』2(順天堂大学医史学研究室所蔵山崎文庫)

この2冊は寛政12年の刊行であるが、『痘瘡作全』の原著は寛政6年とある。その中に「明和年間ニ八丈ノ民ヲ野州芳賀郡ニ移サル暫有ニ老弱共ニ痘ヲ患ヘシ」とある。また、『叢桂偶記』2に、寛政7年伊豆より帰帆の八丈島船の船中で疱瘡を発生した者から島中に流行していった例が記されている。この事例は、その後多くの文献に引用されている。同書によると、この情報は寛政8年丙辰5月3日常陸那珂湊に漂着した船に乗っていた3人の八丈島民から得たものである。この船は、4月に八丈島を出発した三宅島船であるという。八丈島民曰く「八丈島自古痘瘡無、方今一般流行、此病于斃ル者、日々ニ多シ……」と、そして山へ逃れる人々のことや死者数などが詳細に記されている。

明和期は災害による諸作損亡で困窮が続き餓死400人との記録もあり、幕府は明和8年にそれまでの拝借金の精算と「渡世勝手の年季奉公」を奨励し、男81人が内地へ出百姓に出た年である。

2) 山川揚庵(脩徳)著『熱病覈原』巻之1(慶応義塾大学信濃町メディアセンター所蔵)

山川揚庵は、御赦免になった流人を診察したとあり、『熱病覈原』巻之1で次のように述べている。「曩ニ寛政七乙卯ノ年、相州ノ小民禁ヲ犯シメ八丈島ニ流サル於居ルコト三十三年、赦ニ會フテ而歸ル、文政十丁亥年偶々病ニ罹リ余ニ乞テ之ヲ診セシム、語次痘瘡ニ及フ……」と、そして島人曰く、文化六己巳年に仙台の商船が八丈島で故衣の市をするに、故衣中に痘毒があったことから老小盡く患ひ死者も頗る多し、と記している。

流人名簿によると、寛政7年に流され文政9年11月に赦免になった流人が2人いる。その内の1人は、武州播磨郡の百姓嘉平次、罪名は不明であるが在島中に陣屋の大書役に任じ、大賀郷村の書記も兼ねていたとある〔葛西重雄・吉田貫三『増補四訂八丈島流人銘々伝』第一書房、1995: 60, 277〕。

3) 鈴木素行著『医海蠡測』5(東京大学総合図書館所蔵)

鈴木素行は、寛政3年医師田村元長が幕命による薬草木御用で伊豆諸島巡航に随行し、八丈島に2ヵ月滞在して島内の調査をした。その時のことを「寛政辛亥歳航海至八丈島ニ、中男女面皆光滑麻險者百中之一二耳、蓋其人毎食朝草故不出痘云……」、そして「榎立村十年前痘瘡大行、其始有物泛海而来視之桶也、中注連以紅紙作之即祭痘神之具也」と海の漂着物から発症した例を述べている。

2. まとめ

3つの史料は、それぞれにその情報源を明確に示している。また、その情報からは、当時の島の状況を概観することもできる。八丈島に種痘の免状を持った医師が来島し開業したのは明治12年であり、疱瘡流行は明治25年が最後である。尚、三宅島では明治20年に無料で種痘が行われた。